

# 階級の視点から読むアメリカ文学——ソール・ベローの *Dangling Man* 研究——

## American Literature and Social Class : A Study of Saul Bellow's *Dangling Man*

鈴木 元子

文化政策学部国際文化学科

Motoko SUZUKI

Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

アメリカ文学の作品を階級の視座から研究する。唯美主義や新批評による分析ではなく、文学作品を社会や、歴史、文化と接するところで解釈するものである。カルチュラル・スタディーズや社会学の「階級」の概念を援用して、小説の主人公の意識の揺れを分析する。作品としてはアメリカのユダヤ系作家ソール・ベロー (Saul Bellow) の *Dangling Man* (『宙ぶらりんの男』) を取り上げた。

This is a study on *Dangling Man* written by Saul Bellow, a Jewish American writer, from the viewpoint of social class. It is not a close reading under Aesthetical or the New Critical analysis but is explored based on the concept of class being used in fields of cultural studies and sociology. Class consciousness of the protagonist in *Dangling Man* is discussed in relations to society, history and culture.

### 階級の視点から読むアメリカ文学 ——ソール・ベローの *Dangling Man* 研究——

妻アニーに捧げられたソール・ベロー (1915-2005) の第一作目の小説『宙ぶらりんの男』 (*Dangling Man*) は、1942年12月15日から43年4月9日までの日記から成る日記体小説である。ハードボイルドの時代に男性が日記をつけることは、“nowadays is considered a kind of self-indulgence, a weakness, and in poor taste” (9) と断わりをつけながら、28歳のユダヤ系アメリカ人ジョウゼフ (Joseph) は、米軍入隊待機中の日常と心境を綴っていく。この“nowadays”とは1942年も終わりに近づいた頃のことだが、従来この「1942年」という時代性に関心を払う者は少なかった。作品の時代性に注目するよりも、普遍化してしまう傾向が強かったからである。

ゆえに本研究では作品の時代設定を重視し、細かく検証しつつ、階級の視座からの読み直しをはかり、ジョウゼフを中心に作中人物たちの社会階層の位置の析出を試みる。それは、「地方色文学と上流階級」という論考を著したりチャード・H・ブロードヘッド (Richard H. Brodhead) が主張するように、“it is through the analytic agency of class that literature can be examined as a relational field” (Dimock 9) だからである。

#### 1 戦時中

この小説の時代性について目が開かれたのは、ジョウゼフの1942年12月22日付けの日記に、“the posters of foundering ships and faces of Japanese” という9語を発見したときである。目が釘付けになった。安レストランの壁に貼ってあったこのポスターをジョウゼフが目にしたのは、日本軍が1941年12月7日 (米時間) に真珠湾を攻撃してアメリカと開戦してから約一年後のことであった。こうして『宙ぶらりんの男』のこの時代のことを一旦受容すると、作品中の「第二次世界大戦下」を表す言辭が次々と目に飛び込んでくるようになった。

12月17日の戸外、強風が吹きつける閑散とした街

路に、「長い兵隊用のコートに身を包んだ」 (“in a long, soldierly coat”) 通行人が一人佇んでいるシーンや、毎朝新聞を儀式のように隅から隅まで読んでいたジョウゼフがたまに会った友人アプトを相手に、「最初に切り出したリビアにおける戦争の話」 (“on the first subject that came to hand, the war in Libya”) <sup>1</sup> が22日の日記に記されているなど、何気ない日常生活に戦争が忍び寄ってきていることに気づくのである。

さらに国家が戦時下にあることで、人々の暮らしに様々な影響が出始めていた。12月26日、兄エイモスの家に行くと、コーヒー、靴、衣料などの物資配給量の不足が話題になっていた。アメリカ政府が戦時用の備蓄のために販売規制をかける前に、買いだめをしておいた方がよいというのである。そして、1月3日の日記には、太平洋上で戦死した戦死者名簿にジョウゼフの元同級生の名前があったことが記されている。“His rank was given in the paper as ensign; his ship was a Catalina” の記述から、戦死して友人の階級が海軍少尉に昇格したことを複雑な心境で受け取っている主人公の気持ちが窺われる。次の“A Jefferson Forman is listed as having crashed in the Pacific” の一文から、友人は日本軍と戦って戦死したことがわかる。ところが、ジェフ・フォーマンの訃報に心沈む主人公の脇で、靴の買いだめのことしか頭にない兄の姿が日記にくっきりと描写されているのは、ジョウゼフも観察者だからといえよう。

1月11日、市電に“A young soldier and a girl” が乗り込んでくるが、二人とも酔っぱらっている。13日、シカゴのサウス・サイド63丁目のクーロン体育館の前でボクサーたちの写真を眺める。下のキャプションには、“Young Salemi, now with the Rangers in the South Pacific” (青年サレミ、南太平洋の特別奇襲隊を慰問) とある。アメリカでも、スポーツ選手がスポーツに熱中していればよい時代ではなくなっていたのか。物価は高騰し、去年の春25セントだったリール糸が現在は3倍の75セントに跳ね上がり、オレンジの価格も値上がりしていた。4年前には貧民救済法の支援を受けていた人々が、今では軍需工場の職工として高給を取っているという思いもかけ

ない事象も見られた。

ジョウゼフの義父は物資さえ手に入れば、いくらでも金儲けができる時代だと言うが、老人には実際に元手はない。義母はロシア人救援バザーのためにケーキを焼き、女たちは献血に行く。年若い娘たちは若い男がみな兵隊に取られ、残っているのは高校生だけだと嘆き、友人のジャック・ブリルは12月に入隊し爆撃機の爆撃手になるのだと言う。このように、ジョウゼフの日記から「戦争」に関する部分を拾い上げてみると、太平洋戦争、北アフリカ戦線、南アジアでの戦い、ソ連での戦闘と、四つの戦争がアメリカ人の暮らしに暗雲を投げかけていた時代であったことがわかる。

そのような中で、“He isn't working now, he's waiting for the Army, so he has all the time in the world” (22) という皮肉めいた義母の言葉通り、入隊すると思い、一足先に会社を辞めていた主人公は毎日時間を持て余していた。彼自身、“I, in this room, separate, alienated, distrustful, find in my purpose not an open world, but a closed, hopeless jail. My perspectives end in the walls” (92) と表現しているように、会社を辞めたことで社会におけるアイデンティティの大きな部分が失われ、だからとってすぐに入隊・配属されるわけではなく、「待機」しているという「宙吊り」の中にある苦悩を赤裸々に記録している。社会的な疎外感を味わいながら、閉塞感の漂う「牢獄」にいるのと同じで、過去の評論では永らくこれがこの作品の主題であるとの定説を生んだ。

## 2 ジョウゼフたちの階級

このような緊迫した時勢に、ジョウゼフは下宿屋の1室に閉じこもり、妻に養われながら、“I must know what myself am” (1月26日) と深い思索に入る。このアイデンティティの不確かさ(揺れ)は、妻にはアルムスタットという旧姓があるのに対して、ジョウゼフには名字の記載がなく、且つ彼の父親の氏名も不明であるということにそれを読みとることができる。<sup>ii</sup>

ジョウゼフはひきしまった顔に長くてまっすぐな鼻が目立つ風貌をしており、短い口髭を生やし、大きな黒い眼をした黒髪の青年である。背が高く、筋肉は弛んでいるがハンサムで、ウィスコンシン大学を卒業していて、愛想がよくて人に好かれるタイプと自己申告しつつも、「変わっている」(“peculiar” [26], “ridiculous” [28], “the funny side” [28], “odd” [28]) とつけ加えるのを忘れない。思想的には、17歳のときにコミュニストであり、今はマキアヴェリアンに見られることを好むという。大学で歴史学を専攻していたためか、現在でもまるで研究者のように本に取り囲まれている。このようなことからアメリカ社会の階級については敏感であると推測することができる。“You don't believe in the historic roles of classes, do you?” (139) と、おのれの分身に語るのもその例証といえよう。

それぞれの作中人物が当時の社会でどのくらいの階級に位置していたのかを推定してみたい。ブルジョア(資産家)階級には、兄嫁ドリーの父とドリーの兄ローレン、ジョウゼフの兄エイモスが当てはまるだろう。ローレンは

東部の大きな靴会社の社長で、この戦争でアメリカ政府が皮革製品販売を制限するだろうという情報をいち早く入手するのは、政府に近い政財界に身を置いているからである。従って兄の一人娘のエッタは叔父のジョウゼフを見下し、資産家である母方の一族の方を好んでいる。“She prefers her mother's people. Her cousins have automobiles and summer homes” (61) の一節が示すように、「車と夏の別荘」が資産家階級を表すシンボルとして機能しているのを見る。ブロードヘッドによると、南北戦争後にアメリカのエリートは上流階級のバカンスによる養生法を真似るようになったので、夏の高級保養地として、パークシャー、マサチューセッツ北岸、ケープ・コッド、マーサズ・ヴィニヤード、メイン州やニュージャージーの海岸などが新たに開発されたという。避暑地に「小別荘(コテージ)」建築様式が現われたのは1882年頃からである(Brodhead 159)。“Howells' s documentary *The Rise of Silas Lapham* (1885) notes that in the contemporary world the hereditary upper class and industrial nouveaux riches both make it their duty to 'summer,' . . .” (Brodhead 160)。エリートの夏期休暇保養の習慣は重要な象徴的機能を果たすようになり、この集団の社会的優位性を劇的に表現するようになったのである。そこで、エッタのいとこたちが「車と夏の別荘」を所有していることは彼らが資産家階級で、他者に比べて社会的に優位であるということを知らしめているのである。

ジョウゼフより12歳年上のエイモスは株式取引所の使い走りから身を起こし、25歳までに“a member of that body, with a seat of his own” (59) にまで出世していた。このように一代で社会階層の階梯を駆けのぼれたのは、大金持ちの娘ドリーと結婚したことに依る。それを心得ているエイモスは、ジョウゼフにも金持ちの娘と結婚することを強く勧めるが、彼は従わない。大学卒業後は自分の会社で働くようにという兄の助言も無視して就職した旅行会社など、エイモスから見れば“a menial job” (59) でしかなかった。つまり、他人の会社では、それより先に出世していく道筋がないということであろう。ところが、兄の会社なら違う。それは『ペンギン社会学辞典』がアップークラスについてこのように定義しているのを見ても容易に理解することができる——“Family and kinship give a certain coherence to the class, which is reinforced by similar educational experiences, intermarriage and continuing friendship and business contacts” (Abercrombie 404)。

この作品では下宿屋家主の娘婿のブリッグズ大尉、ジョウゼフに臨時の仕事を世話しようとしてくれるマイロン・アドラー、加えて、フルタイムで働いている友人のホワイトカラーたちが中流階級といえる。他には、ワシントンに居住し、北アフリカに飛んだタッド、ブラジルを旅行しているロビー・スティルマン、親友のモリス・アプト、ジョン・パール(画家)、ジャック・ブリル、ミーナ・サーヴェイティアス、ジョージ・ハイザがいる。この中でも大学時代のルームメートのアプトは出世頭のような男で、博士論文を書いて政治学の講師になったが、パーティーの後、今度はワシントンに発って若手官僚になるという。ジョウゼフ

の「それにも満足しないだろう」のコメントから、アプトの出世欲と能力なら中産階級を超えて上流階級まで上りつめるのもそう遠くはないことが示唆されている。ペローの後の作品である『学生部長の十二月』に登場するデューイ・スパングラのような人物になっていきそうである。外部からこの友人たちのグループに入ったというジャック・ブルルは、“Others lean to the snob side. They’re not very agreeable. They’re cold. Even you, if you don’t mind my saying so” (54) と指摘してくるので、戦前に有名大学を卒業していた彼らは中流のスノッブだったに違いない。

それに比して、労働者階級には、下宿屋の部屋を掃除しているメアリと、仕立屋のミスター・ファンゼルが該当する。メアリも、姓、学歴、年齢、家族、住所など一切が不明であるが、“Marie has high standards for white conduct, and her nostrils grow wider when she speaks of him [Vanaker]” (17) の一節から、おそらく白人ではないのではないかと考えられる。白人の下位に置かれている有色人種だからこそ、白人の言動に高い水準を求めるのではないか。舞台はシカゴなので、有色で人口比の多い「黒人」ではないかと推測される。

1月18日、メアリが仕事をしているのを眺めて、日記にこう記す——“In those moments at the window, how different Marie was, how purely human as she rubbed the glass” (113)。ガラスを磨く彼女に対して、無職の彼は内心忸怩たる思いがあったのだろう。一生懸命に働くメアリに比べ、「不安のうちに横たわり、明日はどうなるのかと考えている自分」。だが、逆にこの文章は労働をしなくても食べていける我身が階級的に上位であることをも示している。メアリがプロレタリアートなら、無産階級に働いてもらうのがブルジョアジーである。ジョウゼフは自分を「プチ・ブル」(“petty-bourgeois” 36) と見なしていた。労働をせずに1日24時間自由に暮らし、文芸を楽しめる身分があるとしたら、それは一昔前の「貴族階級」である。しかし、現状は苛酷で、兵隊にもなれない自分は、メアリの目からも“I am of no importance” (15) に違いなかった。他方、ファンゼルは、“He must make money while he can; he is one of the little people” (110) と叙述されるように、自己の労働を提供して賃金を得て生活する「賃金労働者」であった。

ジョウゼフが高校生のときに信奉していたマルクスの『共産党宣言』(1847)では、労働者階級をプロレタリアートと呼ぶ。ジョウゼフも1回だけこの用語を使っている。昔の共産党員仲間のジミー・バーンズにアロウ・レストランでばったり会ったとき、“He still wears that proletarian bang on his earnest forehead and dreams of becoming an American Robespierre” (35) と直感した。そして、自分がバーンズから無視されると、“I’m a contemptible petty-bourgeois renegade; could anything be worse?” (36) と叫んでしまう。実は無職だったのだから、正直にそう言うこともできたのに、プロレタリアートより上位のプチ・ブルと自己認識しているのは、大学を卒業していたからだろうか。貧しい苦学生から出発して、フランス革命を起こすと権力を掌握し、独裁者となって粛清の恐怖政治を行った、「ル

ソーの血塗られた手」ロベスピエールにはもう関心が失せていたからである。

財産がなく、社会的地位も生活水準も低い「下層階級」には、隣の部屋の住人ヴァナカーが該当する。夜間に近所迷惑な咳払いをし、トイレの戸を閉めず、深酒をして空瓶を隣家の庭に投げ捨て、靴下や香水を盗み、最後にはジョウゼフと喧嘩になり下宿屋から追い出される男である。しかしまたヴァナカーのような下層の男が住む下宿屋にジョウゼフ夫妻が居住しているという事実こそ、夫妻の経済的困窮を表している。その前に住んでいたのは、家具つきアパートであったのだから、住環境が落ちたといえる。さらには職もなく、1日中部屋に独りであるという意味では、ジョウゼフもヴァナカーもあまり変わりはない。ジェイムズ・メラード (James Mellard) も言葉こそ違いが同様のことを指摘している——“To the extent, then, that Vanaker is the objective correlative for Joseph’s spiritual craters...” (20)。

アイヴァはヴァナカーに“werewolf” (16) というあだ名をつける。ウェアウルフ (werewolf) の“were” は人間の男性を意味する古英語で、ラテン語の“vir” (ウィル) に由来する。「ウルフ」は狼なので、ウェアウルフを直訳すれば「狼男」となる。狼変身 (lycanthropie) というのは、人間が特に狼に変身する現象で、人狼の存在は古代から文献に見られた (クレベール 69)。狼男にはウルフマンという英語があるのに、なぜここで「ウェアウルフ」としたのだろうか。また、12月16日の日記でジョウゼフはヴァナカーを、“He is a queer, annoying creature” (16) と記述している。民間伝承において狼男は森や畑を荒らし、そこに立ち入る人間を襲撃する悪しき存在である。1935年にハリウッド映画で、狼男を題材にした最初の *Werewolf of London* という映画が公開されたが、内容的には、イギリスの植物学者が珍しい植物を探しにチベットに行き、そこで狼男に襲われて、みずからも狼男に変身するようになり、最後には警官に射殺されるというストーリーである。ペローが狼男を表現するのに、“wolf man” より“werewolf”を採用したのは意味がありそうである。1935年に公開された *Werewolf of London* というタイトルの映画と、その6年後の1941年に公開された *The Wolf Man* ではストーリーが異なっており、ペローのお気に入りな35年の植物学者が登場する映画の方だったのである。<sup>iii</sup>



Werewolf of London のポスター

ヴァナカーに狼男の異名を与えることで、半人半獣の「人間以下」というイメージを付与したのであろう。家中を覗き回るヴァナカーを、メアリは“He is no gentleman” (17) と言う。ジョウゼフの階級意識の中で、ヴァナカーは一段と下位に置かれた存在、ここまでは落ちたくないといった存在ではなかるうか。

この小説の中にはもう一人、マルクスの用語を借りれば、「ルンペンプロレタリアート」と呼べるような人物がいる。ルンペンプロレタリアートとは、無産階級や労働者階級の中でも革命意欲を失った極貧層を指す。特に、『ルイ・ボナパルトのブリュメール 18 日』(*Brumaire*) では、ルンペンプロレタリアートの具体的内容について、次のように記述されている。

いかがわしい生計手段をもつ、いかがわしい素性の落ちぶれた貴族の放蕩児と並んで、身を持ち崩した冒険家的なブルジョアジーの息子と並んで、浮浪者、除隊した兵士、出獄した懲役囚、脱走したガレー船奴隷、詐欺師、ペテン師、ラッツァローニ、すり、手品師、賭博師、ポン引き、売春宿経営者、荷物運搬人、日雇い労務者、手回しオルガン弾き、くす屋、刃物研ぎ師、鍔掛け屋、乞食、要するに、はっきりしない、混乱した、放り出された大衆、つまりフランス人がボエーム [ボヘミアン] と呼ぶ大衆がいた。(マルクス 104)

ぐれて冒険的な生活を送っているブルジョアの子弟や、ギャングや犯罪者などのアウトローをも指す用語である。ルンペンプロレタリアートは、ベローの後の作品である『サムラー氏の惑星』(*Mr. Sammler's Planet*, 1970) でサムラーの姪のマーゴットが口にしており、『フンボルトの贈り物』(*Humboldt's Gift*, 1975) ではシトリンとカンタービレの会話に出てくる。

このルンペンプロレタリアートの範疇に該当するのが、“I work a little, sponge a little, gamble a little. I suppose I am a deadbeat” (130-31) とうそぶく友人のアルフ・スタイドラー (Alf Steidler) である。2月1日、たまたまサウス・サイドでスタイドラーに遭遇し、思い出すのはドニ・ディドロ (Denis Diderot) の『ラモーの甥』(*Le Neveu de Rameau*, 1761) の一節、“... un (personnage) composé de hauteur et de bassesse, de bon sens et de déraison” (DM 127) である。1年前にジョウゼフがフランス啓蒙期の哲学者に関する伝記的なエッセイを書いていたとき、ディドロについても半分くらいまで書いて中断していたのである。ディドロといえば、その『百科全書』は当時の先端技術や科学思想を紹介しながら社会・宗教・哲学等の批判をしたために、刊行が宗教界と特権階級から危険視され、出版弾圧まで受けたのであった。それゆえディドロの名前自体が、支配者階級に対するアンチテーゼを暗示している。

スタイドラーは道路工夫という底辺の仕事から始め、公共事業促進局 (WPA) が閉鎖になると、ルビッチに取り入ろうとして、太平洋沿岸に向かった男であった。実在の人物エルンスト・ルビッチ (Ernst Lubitsch, 1892-1947) は、ロシア系ユダヤ人の洋服屋の息子としてベルリンに生まれたが、父の仕事を継がずに劇場入りし、役者

から始めて制作者に昇格すると、米国に渡ってハリウッドで活躍した映画監督である。徴兵検査にはねられたスタイドラーは、自分はイカレテイルが、ジョウゼフは“normal bastards” (130) だと励ましてはくれるものの、弟のポケットから20ドルを盗んだと平気で言うスタイドラー。ジョウゼフは、“I was as tired as though I had spent the day in dissipations of a particularly degrading sort with Steidler as my accomplice. I did not tell Iva of the visit. She disapproves of him” (133) と彼の低級さを日記に綴っている。アイヴァに嫌われているスタイドラーと自分とでは、人間として大差があると確信しながらも、2月10日の日記にスタイドラーが前週2回も訪ねてきたのは、ジョウゼフを「同類」(“congenial” 148) と見なしているからではないかと不安になる。換言すれば、“we are in the same boat” (148) なのだろうか。本に囲まれ、研究者肌のジョウゼフにしてみれば、競馬での勝敗や詐欺、報復、債権者を侮る手紙、情事について延々と語るスタイドラーと自分とでは品性において階級が異なるはずなのに、家族に依存して生活する経済的な観点からは同階層になってしまう。すなわち、ジョウゼフもルンペンプロレタリアートに限りなく近づいていることを意識せざるを得なかった。

### 3 ジョウゼフとベロー

ジョウゼフにとって、おのれが何者であるかを知る一助は自己のルーツである。そういえば、幼少期の彼を惹きつけたのは「祖父」の写真であった。

It showed him supporting his head on a withered fist, his streaming beard yellow, sulphurous, his eyes staring and his clothing shroudlike. I had grown up with it. And then, one day, when I was about fourteen, I happened to take it out of the drawer together with the envelope in which my curls had been preserved. Then, studying the picture, it occurred to me that this skull of my grandfather's would in time overtake me, curls, Buster Brown, and all. Still later I came to believe (and this was no longer an impression but a dogma) that the picture was a proof of my mortality. I was upright on my grandfather's bones and the bones of those before him in a temporary loan. But he himself, not the further past, hung over me. (75-76)

祖父の写真は、ジョウゼフが紛れもないユダヤ人であることを思い出させてくれた。ラヒリ・マハサヤの写真のように、祖父の写真はジョウゼフが忘れた頃に突然出てきて、彼を放っておかないのである。<sup>iv</sup>

幼少時代、ジョウゼフの家族はモンリオールのサン・ドミニーク通りのスラムに暮らしていたことがある。

I have never found another street that resembled St. Dominique. It was in a slum

between a market and a hospital. I was generally intensely preoccupied with what went on in it and watched from the stairs and the windows. Little since then has worked upon me with such force as, say, the sight of a driver trying to raise his fallen horse, of a funeral passing through the snow, or of a cripple who taunted his brother. And the pungency and staleness of its stores and cellars, the dogs, the boys, the French and immigrant women, the beggars with sores and deformities whose like I was not to meet again until I was old enough to read of Villon's Paris, the very breezes in the narrow course of that street, have remained so clear to me that I sometimes think it is the only place where I was ever allowed to encounter reality. My father blamed himself bitterly for the poverty that forced him to bring us up in a slum and worried lest I see too much. And I did see, in a curtainless room near the market, a man rearing over someone on a bed, and, on another occasion, a Negro with a blonde woman on his lap. But less easily forgotten were a cage with a rat in it thrown on a bonfire, and two quarrelling drunkards, one of whom walked away bleeding, drops falling from his head like the first slow drops of a heavy rain in summer, a crooked line of drops left on the pavement as he walked. (85-86)

階段や窓から覗き見した、このサン・ドミニーク通りの情景——ホームレスや障害者、夜の女性、泥棒、酔っ払いのたむろする移民街は最下層の情景——であったが、ジョウゼフにとってはこれこそが「現実と出くわす唯一の場所」であったと告白されている。つまり、彼の意識の原点はここにあるというのだ。それゆえ飛び級して社会上昇した兄が甘やかして育てている一人娘に対する家庭教育について、“You've taught her to hate the class and, yes, the very family you come from” (72) と文句をつけざるを得ない。自分たちの出自の階級がモンリオールのユダヤ系移民のスラムであることを、記憶喪失者のように忘れて暮らしている兄に対して、抗議せざるを得ないのである。

自分の骨格が母方の祖父の骨格と同じであるという発見は、「母がユダヤ人であればその子どもはユダヤ人」というユダヤ民族のルールに則り、ジョウゼフのユダヤ性が折り紙つきであることを示している。祖父と自分の切っても切れない血筋は、同時に民族の血統を示す。しかしながら、それはドイツ系の友達の家遊びに行ったとき、思いもよらない恐ろしい呪いとなって降りかかってきた。12月27日の日記によると、ジョウゼフの家族は顔立ちがよく、特にジョウゼフはハンサムであった。高校生とき、ヴィル・ハルシャの家遊びに行くと、たまたま家にいた彼の父が妻に向かって、ジョウゼフのことを、“*Er ist schön*”

(「彼は美しい顔をしている」) とドイツ語で話した。ハルシャ夫人もドイツ語で、“*Mephisto war auch schön*” (「メフィストだって、やはりきれいな顔をしていたわ」) と答えた。

この回想は中産階級のジョウゼフが入隊のために職を辞したことで、ヴァナカーと同階層にまで下降してしまったことに暗に繋がってくる。自分では意識していなかったが、ジョウゼフはヴァナカー同様に苛立ち、怒り、大声を出し、喧嘩っばやく、妻のほかにキティ・ドームラーとも関係を持ち、ヴァナカーが「人狼」なら、ジョウゼフは兄に「ジャッカス」(65, 73) と罵られるほど、「動物」にまで落ちていたのかもしれない。ユダヤ教では、魂のない身体を動物という (“A body without a soul is an animal” Blech 21)。ジャッカスとは口バのことで、そこからバカ、まぬけ、うすのろといったシュレミールのな意味合いが派生してくる。ドイツ人夫妻が彼について語った「悪魔」(メフィスト) がひとつのアイコンなら、ジャッカスもまたジョウゼフを表わすもうひとつのアイコンなのである。

ユダヤ教神秘主義の「カバラ」(生命の樹の体系) では、魂を二種類に分け、それぞれ「動物魂」(ネフェシュ) と「人間魂」(ネシャマ) と呼ぶ。さらにカバラの伝統では、進化は順に鉱物、植物、動物の段階から、肉体をもつ人間の段階へと上っていく(ハレヴィ 27)。ジョウゼフに付与された動物や悪魔のアイコンは、人間の世界における彼の経済的・社会的地位の転落を象徴すると共に、精神的な揺らぎ(感情的な爆発、怒り、情緒不安定)を表わしているとも見受けられる。旧約聖書物語のヨセフが極端に上下する人生を送ったように、同名のジョウゼフ(ヘブライ語読みでヨセフ)もその運命の下にあるといえそうである(Pinsker 115)。

モンリオールでスラム暮らしをしていた一家が父のビジネスの失敗から今度はアメリカに流れてくるのだから、シカゴでも移民として最底辺層から出発しなければならなかったであろう。20世紀初頭、移民がアメリカの社会階級においてどのような位置づけにあったかは、リチャード・H・ブロードヘッドのこの言葉を待たずとも——“To this elite at this time, as many studies have shown, the Immigrant became a kind of iconic representation of the lower classes thought of as class antagonists” (164)——、まさに下層階級を表わしていたのである。さらにジョウゼフの国籍が「カナダ国籍」のままであったことから、この『宙ぶらりんの男』という日記体小説は始まったのである。ジョウゼフが「アメリカ人でない」ことが原因で、入隊の手続きが遅れに遅れ、その数カ月間の当事者の心境を綴ったのがこの小説だからである。そして、この辺りの事情は、作者ソール・ペローの伝記的な事柄をかなり反映しているといえる。

1942年にペローはメルヴィン・トゥミン(Melvin Tumin)に宛てて、“I am again I-A; last week I took a second blood test and if my virtue is vindicated I shall be inducted within the next two weeks” (L 21) との書簡を送っている。トゥミンはのちにプリンストン大学で社会学の教授になり、人種関係の研究で有名になるが、このときは博士課程に在籍して、グアテマラで調査をしていた(L 24)。この書簡からペローもジョウゼ

フと似たような生活を送っていたことがわかる。この頃ベローはすでにアニーと結婚していて、ジョウゼフがアイヴァに依存しているように、ベローも彼女に養われて小説を書いていた。ベローは父からの資金援助には恥ずかしさを感じていたし、重ねて、作家という職業を選択したことに対する後ろめたさが付きまっていたのである。このもどかしさに打ち勝つために、強制的に徴兵されたいと望むまで追い詰められていた (L 25)。

ある日の午後 2 時半、元指導教授のメルヴィル・J・ハースコビッツ (Melville J. Herskovits) から電話がかかってきたことがある。

"In some detail he insulted me on each of the following: 1. The fact that I am unemployed and at home at 2:30 P.M. 2. My lack of qualification as an applicant for any consideration from the national roster. 3. The fate of my novel. [...] And last, *in algemein* [\*], my wasted life." (L 26)

侮辱された内容の 1 と 2 はジョウゼフと共通し、3 は小説の執筆状況と出版についてだが、ジョウゼフもデイドロの原稿を未完成のままにしていたので、ほぼ相似していることになる。このときベローは出版社に送った短編小説が却下され、惨めな思いに陥って「クマ」になっていたところだった。

There is nothing new with me. I am a recluse, I am a bear. I bite people's heads off when they cross me. I have known one hundred sixty-nine brands of humiliation. Two weeks ago I stopped work on my novel—it was not direct enough—and have since solaced myself with a book called *The Notebook of a Dangling Man*. (L 27)

ベローは 1942 年 2 月 23 日に The Colt Press の編集長ウィリアム・ロスに宛てた手紙の中で、"because the Army is hot on my heels and I should like to have the fate of the book decided before I leave" (L 29) と書いているし、さらに 4 月 2 日の手紙においては、"The Army has just notified me that I will be inducted on June 15th. With this hanging over me I would like to clear up all my business, and especially *The Very Dark Trees*, as quickly as possible" (L 29) と書いている。実は、ベローの入隊日もカナダ国籍のために日程が延びていたのである。

1943 年に、シカゴからベローがドゥワイト・マクドナルド (Dwight Macdonald) に宛てた手紙にはこう記されていた——"I [...] am now nearing the end of *Notes of a Dangling Man*, a short, semi-autobiographical novel which rather pleases me. I am going to have to peddle this one on my own, too" (L 34)。

ついに 1944 年 3 月 23 日にバンガードプレスから

『宙ぶらりんの男』が出版されると、エドモンド・ウィルソン<sup>6</sup>が『ニューヨーカー』誌で、"one of the most honest pieces of testimony on the psychology of a whole generation who have grown up during the Depression and the war" (Atlas 99; L xxi) と高く評価してくれた。このように『宙ぶらりんの男』は半自伝的な小説で、モンリオールのユダヤ系移民の子という出自ばかりか、カナダ国籍のために入隊が遅れたというのもソール・ベロー自身が経験したことだったのである。

#### 4 エッタとの衝突

次にジョウゼフの変人ぶりを炙り出すために、兄との関係、また姪との衝突事件を中心に考察してみたい。兄は弟の職業選択や生き方に関して、"strange" (59) だと決めつけていた。ジョウゼフが失業すると小切手を送ってきたが、すぐに送り返すほど弟は誇り高かった。食費をうかすようにと兄は頻りに食事に招いてくれ、弟に服を贈ると言い、断るとひどく腹をたてた (『オーギー・マーチの冒険』にも同様のシーンがある)。

エッタは 15 歳だが、うなじをのぼして歩く姿は賞賛すべきもので、エッタも自分同様誇り高い女性だとイザヤ書 (3:16-17) まで引用している。ところが、二人の間には、"a longstanding antagonism" (61) があったのである。兄が子どもの頃の苦労話をして、結局エッタは資産家の娘として生まれてきたのだし、資産家の娘として育てられたのである。それは、ジョウゼフとは全く別世界の人間であることを意味した。つまり、両者の暮らしぶりと考え方に、それだけ社会階級的な差があったことになる。しかしながら皮肉なことに、ジョウゼフとエッタには身体的な相似もまたあったのである (62)。祖父の骨格とジョウゼフの骨格との類似、そして、ジョウゼフとエッタの骨格との類似は、理性や嗜好をはるかに超えたものであった。エッタの側からすれば、彼女の恐怖は自分の中に軽蔑すべき叔父の血が混じっていることで、一方ジョウゼフが恐怖するのも、子どもがいない自分たち夫婦にとってみれば、自分が過去から受け継いできた血 (DNA) がエッタの中に入っているからこそ、こんな愚かな娘であっていいのか、という不満やらかなない気持ちが生じてくるのであった。

「一日も早く入隊して、幹部候補生の資格を取ることだ」(64) と急かす兄に対して、ジョウゼフには出世欲というものがないので、生き方も違えば折り合う部分もなく、終極、戦争に対する考え方も異なっていた。戦争も出世や金儲けの機会と捉えるエイモスに対して、ジョウゼフは、"As I see it, the whole war's a misfortune. I don't want to raise myself through it" (64) や、"Socrates was a plain foot soldier, a hoplite" (64) と考えていた。兄がくれた百ドル紙幣をつき返すと、"You are the most obstinate jackass I've ever seen" (65) と叱責される。さらに追い打ちをかけるように、その娘のエッタに彼は "Beggars can't be choosers!" (70) と「乞食」呼ばわりまでされ、おまけに "You dirty . . . dirty no-account. You crook!" (70), "like a pool-room bum" (72) と散々侮辱されるのである。この "bum" とは「ルンペン、怠け者、無能な人」の意味で、ついには、ブルジョアの姪に「泥棒」("thief" 73) と勘繰られるところまで

エスカレートしていく。

他方、ジョウゼフの実父も、化学を勉強していた息子が学校をやめて軍需工場に働きに行き、“an excellent job” (124) に就いたという友人の話を引き合いに出してくる始末である。それに対して、ジョウゼフは職業やひいては階級についてこう考えている。

This means that I, too, should have been a chemist or physicist or engineer. A non-professional education is something the middle classes can ill afford. It is an investment bound to fail. [...] My accomplishments, he acknowledges, are wider than his; my opportunities were greater. But bread and butter come first. [...] My father's justification is, however, that I have prepared myself for the kind of life I shall never be able to lead. (124-25)

中産階級には実用教育（職業教育）こそ必要で、職業に結びつかない学問などは子どもへの投資が失敗したも同然で、まずは食い扶持を稼ぐことが第一なのだという父の考えも、それはそれで理解できるのだが、そのとき自分が目指してきたものが、到底手の届かない世界であるような気がしてきて、戸惑うのである。つまり、この1940年代でも、まだユダヤ人にとって「成功」とは何かという問題が提起されていたのである (Gilman 126)。言い換えれば、中産階級の息子が望んではいけな階級を望んでいる、といった一種の階級的疎外感を味わうのである。

さらに、妻に養われだすと、予期しなかったことが起こり始める。妻が自分に反抗するようになったり、妻の指図を受けて小切手を換金するために銀行に行ったり、妻の実家で義父の介護をしたりと、ジョウゼフの主夫化や女性化（役割分担的な意味での）を強いるような状況が生じてきたのである。

ジョウゼフはみずから中産階級と認識していた。プチ・ブルジョアとさえ思っていたのかもしれない。ところが実態は、ヴァナカーやスタイドラーのレベルまで下降しそうな危機を孕んでいた。日記を書く習慣から、ジョウゼフはそれを意識化できるような立場にいた。無職・無収入に加え、正常な中産階級からは逸脱した品性・物腰まで徐々に見られるようになってきていた。暴言暴力に近い行為が銀行やアロウ・レストランで見られ、また兄の家ではエッタの尻を叩くなど、これまで彼女の両親でさえしたことのないことをしてかき、さらにはアイヴァとの口論、最後にはヴァナカーに対する爆発といった具合に、5回の事件を引き起こした。ヴァナカーは他人の部屋から靴下や香水を盗み、スタイドラーも弟のポケットから20ドルを盗むような泥棒だった。この二人とは絶対に一線を画していたはずのジョウゼフなのに、ぶらぶらしている叔父さんだから母ドリーの寝室で何かを漁っていたとエッタに盗みの嫌疑をかけられてしまったのである。“Convicted of theft, or assault, or worse. . .” (74) における“worse”のあとの語られていない言葉は、エッタの悲鳴から性暴力の嫌疑さえ浮上したことを物語っている。ジョウゼフの名前が由

来する聖書のヨセフも婦人暴行の「冤罪」で投獄されたことがあった。

## 5 おわりに

小説の最後でアイヴァの言葉から、繕いができないくらい繕った服をジョウゼフが着ていたことが（読者に）判明すると、彼はすでに中産階級には留まっておれず、ひどく困窮していたことが露わになる。徴兵委員会に手紙を書いて、入隊を早めてもらうのは、自分の階級的下降をようやく意識したジョウゼフがやむにやまれずに取った行動といえる。もともと日記をつけ始めた動機が「おのれを知りたかった」からで、「わが身に何が起こりつつあるかを見逃さずにいた」(27) だったからである。

それはまた、ハードボイルド派に対する挑戦でもあったろう。ヘミングウェイのように、「飛行機を乗りまわし、猛牛と闘い、大魚を釣り上げる」ハードボイルド派に対して、ペローのジョウゼフは自室を出ることが殆どなく、椅子に根が生えた状態で、心の中の真摯な問題に向き合っていたからである。アメリカのWASPの文体であるハードボイルドが「アメリカが受け継いだイギリス紳士の遺産」(9) であるとするならば、カナダを経由して東欧の旧大陸から新大陸に移民してきたユダヤ系アメリカ人にとって、すなわち戦時中に内省するユダヤ系にとって、真に迫る問題とはアメリカに同化することの意味とその決断ではなかっただろうか。小説全般を通して、反体制の匂いがするもの、それはジョウゼフのアメリカの社会や文化に同化していくことへのユダヤ民族としての最後の「ためらい」があったからであろう。米軍に入隊して、米軍兵士になっていくことへの「ためらい」である。本当にこれでいいのか？ この国のために命をかけて戦う価値があるのか？ 父親の生き方は「ねずみ」でしかなかった。ねずみはかごに入れられてかがり火に投げ込まれる(86)。弱ければ生き残れないのがアメリカの社会だ。兄のようにあつという間にアメリカの商業主義社会に同化して、金融ゲームに走ることもも賛成できかねた。実際、そのようなビジネスのオモなかつたし、関心もなかつた。本に囲まれて、書くという仕事がかつただけである。だが作家を志しても、反道徳的で暴力的な内容を批判せずに、客観的で簡潔な描写で書くヘミングウェイのハードボイルドを受け入れるつもりはさらさらなかつた。関心があるのは、「伝記風」なものであった。ジョウゼフも、その背後にいる作者ソール・ペローも実際に書き始めていたが、まだ迷いのうちにいたことが了解される。

“And, of course, I hope to survive. But I would rather be a victim than a beneficiary” (84) と述べる時、2千年間もディアスポラの民であったユダヤ民族、犠牲者としてのユダヤ民族のある種の肯定的な声を聞く思いがする。それは具体的にアメリカという国家において、どの社会階層に生きることが最もユダヤ人らしいのか、言い換えればユダヤ人の「リアリティ」なのか、或いは「ユダヤ人らしさ」(ユダヤ性) を保持できるのかという深遠な問題だったはずである。戦前、ドイツ社会に同化しようとしてユダヤ人たちはユダヤ教を変えて同化を試み(ユダヤ教改革派)、またキリスト教に改宗したり、キリスト教徒と結婚する者も一時期増えたが、結局失敗に終わったと

いう歴史的に苦い経験があった。

そうすると、日記の最後の叫びである “I am in other hands, relieved of self-determination, freedom canceled. Hurray for regular hours! And for the supervision of the spirit! Long live regimentation!” (191) は、立派な「アイロニー」といえよう (Mellard 21; Lyons 24; L 36)。軍隊に入っても前線で殺し合いはしたくない、軍隊の中で一生懸命やって出世したいとは思わない、戦争には賛成できない、という彼の考えを保持したままの入隊だからである。そこで、先はもう見えている。春、そろそろ穴倉から出てよい季節になっていた。

最後に、作者の執筆事情について少し触れるならば、ペローは現実問題として、一旦ここで『宙ぶらりんの男』の筆を置かざるを得なくなった、自分の入隊のために。入隊前の1944年3月にこの作品を出版すると、4月に長男誕生、再度の延期を経て、翌春には新兵訓練基地のシープスヘッドで大西洋本部付になる。軍から解放されたら、親友のアイザック・ローゼンフェルド (Issac Rosenfeld) のようにフリーランスの作家になるつもりでいた (L 40)。



①ペローのシカゴ大学社会科学研究棟にあるかつての研究室 #502



②高層アパート「クロイスターズ」の看板。



③ソール・ペローやアラン・ブルームがかつて居住していた「クロイスターズ」。シカゴ大学のキャンパスの南端にある。

## 注

- i リビアでの戦争とは、1940年9月にイタリア軍がエジプト侵攻を謀ったため、イギリス軍もリビアに侵入した。そしてイタリアの要請を受けたドイツも1941年2月にロンメルを指揮官とするドイツアフリカ軍団をリビアに送り、ベンガジを奪回、トブルクを包囲した。だが、1942年10月からイギリス軍がスーパーチャージ作戦を開始すると、枢軸軍はリビアへと撤退した。
- ii "My (own) father" (Dec. 17, Jan. 5) だけである。いくら日記といっても、一度くらいは本名を記せたはずである。
- iii 後の作品 *More Die of Heartbreak* には植物学者が登場する。
- iv 祖父とは実母の父親のことで、亡くなる少し前に撮影したものである。これは、のちの小説 *More Die of Heartbreak* で言及されている *The Autobiography of a Yogi* (MDH 40) のラヒリ・マハサヤの写真と効果において類似している。マハサヤ大師は、自伝の主人公の誕生を祝福して2、3年後に亡くなっている。大師の写真は、彼の生涯にわたって試練や困難時に祈ると不思議な効験を発揮した。

## 引用資料一覧

- Abercrombie, Nicholas, Stephen Hill, and Bryan S. Turner. *The Penguin Dictionary of Sociology*. 5th ed. New York: Penguin, 2006. Print.
- Atlas, James. *Bellow: A Biography*. New York: Random, 2000. Print.
- Bellow, Saul. *Dangling Man*. New York: Vanguard, 1944. Print.
- . *More Die of Heartbreak*. New York: William Morrow, 1987. Print.
- . *Saul Bellow: Letters*. Ed. Benjamin Taylor. New York: Viking, 2010. Print.
- Blech, Benjamin. *The Complete Idiot's Guide to Understanding Judaism*. 2nd ed. New York: Alpha, 2003. Print.
- Brodhead, Richard H. "Regionalism and the Upper Class." Eds. Wai Chee Dimock and Michael T. Gilmore. *Rethinking Class: Literary Studies and Social Formations*. New York: Columbia UP, 1994. 150-74. Print.
- Dimock, Wai Chee and Michael T. Gilmore, eds. *Rethinking Class: Literary Studies and Social Formations*. New York: Columbia UP, 1994. Print.
- Gilman, Sander L. *Multiculturalism and the Jews*. New York, London: Routledge, 2006. Print.
- Lyons, Bonnie. "From Dangling Man to 'Colonies of the Spirit.'" Ed. Gerhard Bach. *The Critical Response to Saul Bellow*. Westport, Connecticut: Greenwood, 1995. 23-28. Print.
- Mellard, James. "Dangling Man: Saul Bellow's Lyrical Experiment." Ed. Gerhard Bach. *The Critical Response to Saul Bellow*. Westport, Connecticut: Greenwood, 1995. 14-23. Print.
- Pinsker, Sanford. *The Schlemiel as Metaphor: Studies in the Yiddish and American Jewish Fiction*. (Revised and Enlarged Edition). Carbondale, Edwardsville: Southern Illinois UP, 1971, 1991. Print.
- クレベール, ジャン=ポール 『動物シンボル事典』 竹内信夫他訳 東京 大修館書店 1989。
- デイドロ, ドニ 『ラモーの甥』 本田喜代治・平岡昇訳 東京 岩波書店 1940 1992。
- ハレヴィ, ゼヴ・ベン・シモン 『イメージの博物誌 11, ユダヤの秘義: カバラの象徴学』 大沼忠弘訳 東京 平凡社 1982 1998。
- マルクス, カール, フリードリヒ・エンゲルス 『共産党宣言・共産主義の原理』 水田洋訳 東京 講談社 1972 2008。
- マルクス, カール 『ルイ・ボナパルトのブリュメール 18日』 植村邦彦訳 東京 平凡社 2008。
- 《画像》
- "Werewolf of London (1935)." (ポスター) Web. 28 Sept. 2012. <<http://www.imdb.com/title/tt0027194/>>
- 写真① ベローの在職中のシカゴ大学の研究室 (2010年筆者撮影)
- 写真② 高層アパート「クロイスターズ」の看板 (2010年筆者撮影)
- 写真③ 高層アパート「クロイスターズ」 (2010年筆者撮影)

